

書評

小山内美智子 著

あなたは私の手になれますかー心地よいケアを受けるために

二本 立 (日本福祉大学)

小山内美智子さんは、脳性マヒのすべての症状をもち、日常生活動作「全介助」の重度身体障害者だ。しかし、「普通の人間としての生活」を求め、20年前にわが国の障害者自立生活運動の草分け「札幌いちご会」を結成。以来、障害者が地域で生活できるための介助・ケアを要求・組織しながら、数え切れないほど恋をし失恋をし、結婚も出産もし、そして離婚もした。

本年からは、県立宮城大学看護学部の客員講師も始めた。科目は「介護」。しかし、「ケアを受けるプロ」からみると、「いままでの教科書は介護をする立場から書かれているものばかり」。そこで、講義に使うために書いたのが本書だ。キーワードは「心地よいケア」で、以下の4章構成。

第1章・21世紀のケアで、著者はケア「専門職」の奢りを厳しく批判する。「リハビリテーションを指導するPT、OT、医師、教師たちはたくさん間違いをしてきた」、「病院では、心地よいケアは受けられない」。しかし、著者の苦痛に満ちた体験に基づいているだけに、説得力がある。

第2章・毎日のケアは本書の白眉だ。著者が毎日受けているケアの経験に基づいて、起坐や食事から「長い旅」にいたるさまざまな動作・行動別に、「心

地よいケア」の受け方と仕方のポイントが具体的に書かれている。介護・看護だけでなく、リハビリテーションに携わる人びとにとっても、教えられることは少なくないだろう。

第3章・ケアを受ける側とする側のエチケットは、著者が「本音を言ったら（介護者に）嫌われて逃げられるという恐怖感」を捨てて書いてだけに、本書中もっとも迫力がある。

第4章はエッセー。著者の筆は、セックス・ケアや、ケアと宗教・イデオロギーとの関係など、一般にはタブーとされることにまで及んでいる。

本書は、やさしく読めるし、ユーモアや金言にあふれてもいる。しかし、著者の問いかけは重く、それだけに、多くのリハビリテーション関係者に読んでほしいと思う。

ただし、本書で書かれているのは、十分なケアを受けられれば、「働く可能性を持っている人たち」であり、高齢者や知的障害者のケアにはほとんど触られていない。これは、経験したことのみを書くという著者の知的誠実さのためだろう。しかし、ここに自立生活運動の狭さが垣間みえることも否定できない。

(四六判 270頁 1,500円(本体価格) 1997 中央法規出版刊)